

た、また脳波異常とそのときの臨床症状および炭酸リチウムの血中濃度との関連についても若干の考察を加えた。

### 19. Phenobarbital 単独投与の小児における血中濃度の年齢的差異

(小児科) ○北原 久枝・後藤 友子・  
杉江 陽子・福山 幸夫

Phenobarbital (以後 PB と略) は、kindling preparation を用いた実験で、その抗けいれん効果と共にてんかん予防効果もあることが確かめられており、臨床上也てんかんの治療や熱性けいれんの予防等に広く使われてきた。一方その副作用としての不活発、興奮性、多動等が、特に発達途上の小児の知能発達に及ぼす影響は無視できないといわれてきている。また成人でも PB 血中濃度が 20~30 $\mu$ g/ml で perception motor performance に影響を与えるとの報告である。したがって PB の投与量と血中濃度の関係はある程度予想をたてることは重要であるが、年齢別にその関係について検討した報告は少なく、Svensmark & Buchthal らは体重別に 10kg から 43kg の小児について検討し、PB 血中濃度/投与量比 (以後 S/D 比と略) は体重とほぼ直線関係にあるとし、大人は S/D 比で 10.0 であると報告している。今回われわれは 2 カ月から 16 歳までの PB 長期単独投与小児 117 症例を年齢別に投与量と血中濃度および S/D 比について検討し以下の結果を得た。

乳児から 4 歳未満では投与量と血中濃度はかなりよい相関を示し S/D 比も年齢と共に大となっていくが、4~5 歳および 7~9 歳の S/D 比の増加は小さく、投与量と血中濃度の関係の変動も大きい。11 歳以後になると変動も少なく、S/D 比も年齢と共に成人の 10 に近づいていくようである。4 歳から 9 歳にかけての S/D 比の横ばい状態の理由としては、小児の発達という側面から考えてみる必要があると思われるが、コンプライアンスの問題も含めてさらに症例を重ねながら検討していく予定である。

### 20. CTscan において脳室拡大像を示した Laurence-Moon-Biedl-Bardet syndrome の 1 例

(神経内科) ○樋上 裕子・岡山 健次・  
竹宮 敏子・丸山 勝一

Laurence-Moon-Biedl-Bardet syndrome には肥満・網膜色素変性症・知能低下・性器發育不全・多指(趾)症・家族内発症の 6 主徴が知られている。その病因には常染色体劣性遺伝子の障害が考えられ、わが国でも既に

200 例以上の報告があり、糖代謝・甲状腺機能・副腎機能の異常に関する報告が注目を浴びている。

患者は 26 歳の女性で、肥満 (+42%)・網膜色素変性症・多指趾症・家族内発症の 4 徴候を有し、他に兔唇・小舌症・歯列不整等の奇形を伴っており、頭蓋 X 線写真において扁平頭底症があつた。今回われわれは明らかな中枢神経症状や知能障害を認めなかつたにもかかわらず、CTscan において脳室拡大像のみられた Laurence-Moon-Biedl-Bardet syndrome の 1 例を経験したので若干の考察を試み、報告した。

### 21. 動脈瘤における RI angiography の意義

(放射線科)

○榊原 幸子・喜多みどり・和貝 恵子・  
牧 正子・日下部きよ子・山崎純四郎・  
重田 帝子

目的：動脈瘤の疑われる症例に対し、RI angiography をおこない、続いて種々の方向から blood pool scan をおこない、大動脈造影による所見と対比し、検討を加えた。

方法：動脈瘤の疑われた症例 10 例に  $^{99m}$ Tc-HSA (human serum albumin) を静注後、1.5~2 秒間隔で、シンチカメラ (PHO/GAMMAWA) により連続撮影し、sequential image を得、次いで static image を得た。

結語：I) RI angiography により得られた所見は、大動脈造影所見に良く相関し、大動脈瘤の範囲の推定に有効であつた。II) 大動脈造影法と比較し RI angiography は、①手技が簡単である (RI 静注のみ)、②患者の負担が軽い、③反復検査が可能。(被曝量が少ない)、④dynamic image に続いて多方向の static image を得ることが可能。( $^{99m}$ Tc-HSA を使用)。

以上より、大動脈造影法の適応を決定する検査として有用であると思われた。

### 22. 副腎の CT スキャン

(放射線科)

○広沢 邦浩・成松 明子・松永和歌子・  
鈴木 恵子・飯田 恵子・平松 慶博

副腎疾患の X 線診断は血管造影の普及と副腎シンチグラフィの進歩により、近年、非常に診断能が向上してきた。皮質腺腫では直径 1cm 以下のものまで診断可能となつて来ている。

1974 年以降、CT スキャンが全身に應用されるようになり、後腹膜腔臓器の診断に非常に有効であることが数多く報告されている。後腹膜疾患の X 線診断に大きな